

1.はじめに

一般地での早春どり(3~4月)は、早播きトンネル栽培で、厳寒期を経るために栽培が難しい作型となっていますが、品種に合わせた栽培技術の向上により安定的な出荷が図られるようになってきました。

また、暖地においてもこの時期の栽培があり、トンネル、べたがけ、マルチ、露地作型の栽培が各地域で工夫され、だんだんと定着するようになってきました。

弊社では、長きに亘り『春風太』をご愛顧頂いておりますが、新たに『春桜舞』を新発売しますので、ご紹介いたします。

2.『春桜舞』の品種特性

≪極晩抽性で低温期の生育に向く越冬向き春ダイコン≫

①葉は中小位の濃緑色で、耐寒性がある極晩抽性です。一般地の晩秋~年内播きのトンネル栽培に適し、暖地で

はトンネル栽培の他、秋~晩秋播きの露地、マルチ、べたがけでの越冬栽培に適します。

- ②根長35~41cm、根径7.0~9.0cm、根重1.3~2.0kgにきれいに太ります。
- ③根形は尻づまりがややゆっくりな総太り型となります。低温期でも根長が出やすく、吸い込み性が強くないため抜きやすい品種です。
- ④青首が鮮やかで肉質は緻密であり、青果用を中心に出荷できます。
- ⑤空洞症、裂根、す入りなどの内部障害に強く、抽苔も極遅いため、低温期での生育が安定し歩留りが高いです。そのため加工など大きめの収穫にも向きます。
- ⑥施肥の考え方
耐寒性はありますが、厳寒期の作型であることと生育がややゆっくりな品種であるため、肥料切れに注意して肥大させてください。

3.『春桜舞』の適作型と

栽培のポイント

1)一般地・暖地のトンネル栽培

- ①10月の過度な早播き、および1月の過度な遅播きは長根、肥大不足の原因となりやすいため、適期播種を行って下さい。
- ②施肥は10aあたり成分量で窒素10kg、リン酸15kg、カリ10kgを目安として、事前に圃場に良く混和しておいて下さい。
- ③マルチは3条~4条で株間は23~27cmの高畝栽培を基本として下さい。一般地では地温確保や凍害対策として、初期のべたがけ被覆が有効です。
- ④一般地・暖地の11月播きトンネル栽培ですが、厳寒期(1月)は肩コケに注意して保温ぎみの管理として下さい。その後、肥大中期(2月頃)から徐々に換気を強め、葉が旺盛となる前(3月上中旬頃)にトンネルを除去した方が、根形が整いやすいです。
- ⑤過度な蒸し込み栽培や換気遅れは黒斑病や肩張りの原因となります。



▲写真 『春桜舞』一般地トンネル栽培



▲写真 『春桜舞』一般地トンネル栽培(トンネル除去、収穫期)

2) 暖地のマルチ～べたがけ栽培

- ① 暖地マルチ栽培は厳寒期に凍害の心配が極少ない地域を選定して下さい。低温期に生育が停滞しやすいので、肥料切れしないバランスの良い肥培管理を行って下さい。
- ② 11月中旬以降の播種では低地温で短根の心配がありますので、初期から厳寒期にかけてべたがけ被覆を行って地温の確保に努めてください。
- ③ 冬期間の生育停滞により黒斑細菌病などの葉病害の心配がありますので、初期から定期的な殺菌剤防除を行って下さい。

3) 暖地の露地密植栽培

- ① 暖地露地環境において密植適性、耐寒性、極晩抽性であるために3月中旬以降の収穫に向きます。
- ② 条間40～42cm、株間18～20cm前後を目安として下さい。
- ③ 施肥は追肥体系となりますが、葉がやや大人しいので、生育途中の肥料切れには充分注意して下さい。収穫時期の肥大がゆっくりで、極晩抽性なので、収穫の幅がとりやすいです。
- ④ 冬期間の生育停滞により黒斑細菌病などの葉病害の心配がありますので、初期から定期的な殺菌剤防除を行っ

